

経済情勢

概観

海外

◇ IMF 第15回総会の開催

国際通貨基金（IMF）および世界銀行の第15回年次総会は9月26日より30日までワシントンにおいて開催された。本年は昨年、一昨年の総会における両機関の増資、第2世銀の設立などのごとき具体的措置の決定は行なわれなかったが、世界的な国際収支の動向、後進国開発援助を中心に、当面の国際金融の諸問題につき活発な論議が展開された。

IMF専務理事ヤコブソン氏は、一部の後進国を除いては全般的に各国の健全な財政金融政策による物価の安定、貿易・通貨に関する諸制限の撤廃の努力により、世界貿易はこの10年間に倍増し、国際政治情勢の不安定にもかかわらず経済金融の分野においては世界的に正しい方向への大きな進歩がみられつつあることを強調した。

とくに最近における短期資金の国際的移動の活発化については、通貨交換性回復と貿易・為替の自由化を背景とした国際金融組織の整備と欧米間の金利差の拡大を映じた当然の成行きであって、各国の為替相場の安定、対外準備の充実、IMFの資力増加などによる国際為替体制の強化に照らし、短期資金の動きをさほど懸念する必要はないとの見解を明らかにした。

また各国代表の中では、英代表ロイド蔵相が西ドイツ、フランス、イタリアなど一部西欧諸国の継続的かつ巨額の国際収支の受取超過が世界的国際収支の均衡に重大な脅威となりつつあることを指摘し、これが原因として各国間の物価の不均衡、受取超過国の資本輸出の不足をあげ、米代表

アンダーソン財務長官も各国が対外収支上妥当な均衡を保つ義務のあることを強調するとともに、最近の金流出にもかかわらず、インフレ圧力の消滅によりドル価値はいっそう安定的となっており、今後も健全財政経済政策による金価格堅持の方針を再確認した。

これに対し、西ドイツ代表エアハルト経済相は、後進国援助にいっそうの協力を約しつつも同時に後進国側において外資受入れ体制の確立など、自ら努力する必要があることを強調するとともに総会前から高まっていたマルク切上げ問題に関してはその意思のないことを明らかにした。またこの問題とも関連してブレッシング中央銀行総裁は近く公定歩合引下げを行ないうるようになることを望むとの発言を行なって注目された。

総会終了数日後の10月6日フランスは公定歩合の引下げ（4%→3.5%）を行なったが、今回の引下げは各国中央銀行との話合いの上行なわれたものと伝えられ、近く英、独がこれに追随するであろうと一部に予測されていることから、今後の欧州金利動向が注目される。

国内

◇ 景気は引続き落ち着き模様

国際収支は経常収支尻の黒字が続き、改善傾向をたどっているが、国内経済の動きには、生産の増勢が思ったよりも強く、商品市況また総じて底堅く推移するなど、基調はなお強いという印象もある。しかし大勢としてみれば、景気は引続き落ち着いた局面にあるものとみられる。

9月の経常収支尻は、78百万ドルの黒字と、黒字幅が著しく大きかった。輸出が欧州向け魚介、

台湾向け化肥など全般的に好調だった上、輸入が食料の減少を中心として著しい低水準にとどまったためである。これにユーロ・ダラーの流入や無担保借入の自由化などを背景とした短期外資の流入が加わって、総合収支戻では84百万ドルの黒字となった。ただ当月あたりから、ユーロ・ダラーの一服などによって、短期外資流入が伸び悩んできたことが注目される。

8月の鉱工業生産は1.1%の上昇となった。これまで生産拡大に大きく寄与してきた機械工業が、自動車で夏休み制の採用が広がったため減産（前月比-0.6%）となった反面、化肥が操短解除により急増（化学、前月比+5.3%）するなど区々の動きもあったが、このところ生産は設備投資や自動車中心に引続き根強い拡大を続けている。

8月の生産者製品在庫はやや増勢が強まり（前月比3.7%）、在庫率も高まった。8月の製品在庫増は、耐久消費財（冬物の出荷まちと来夏用の仕込み期入りとが重なったもの）が中心であるが、紙・パルプなども増勢が強まっている。製品在庫の基調は大勢としては横ばいとみてよいが、8月の動きは9月も続く可能性なしとせず、波状調整の一つのあやが出ているのではないかという意味で注目される。原材料在庫は輸入分がふえているが企業の投資態度は引続き落ち着いている。

商品市況は、9月下旬繊維相場が反落するとともに、木材もこのところ騰勢やや鈍化しており、強含みながらも落ち着いてきた。これを映じて本行卸売物価（食料を除く）も、9月1.1%の上昇に対し、10月上旬は0.2%上昇となった。当面の市況には、供給余力の漸増などもあり、あまり上伸力がないことはたしかである。しかし総じていえ

ば、8月ごろから市況が底堅く推移していることは否定できない。これは季節的なものを含めて、需要が堅調なことを示すものではあるが、春以来のなしくづし調整によって需給のアンバランスが若干改められたことが下地をなしている。

◇市中貸出の高水準続く

9月の銀行券は月中79億円の発行超（前年同月60億円増）となり、月中平均発行高の対前年同月比も18%の増加（8月+16%）と高まった。しかし、これは8月がむしろ低かったためで7～9月をならしてみれば、対前年同期比は17.2%増と従来の基調に比べ格別の変化はみられない。

一方、全国銀行貸出は1,770億円の大規模増加を示した（前年1,305億円、+35.6%）。これによって当月は預金通貨供給もかなりふえたとみられる。しかし経済規模の拡大に比べれば、通貨供給は引続き押えられ気味である。

当月貸出増勢の中心は、大メーカー運転資金および設備資金にあることは従来と変りはないが、貿易関係資金および中小メーカー運転資金の貸出はこのところかなり増勢が落ち着いてきている。また商社貸出も、当月は外貨保有わくの拡大に伴い増加をみたが、これを除いてみれば、大勢としてはここ2～3か月増勢は横ばいに転じてきている。なお、最近の貸出を通じて注目されるのは、とくに都市銀行において貸出増加額が大きいこと、月による季節的波動があまりみられなくなったことである。すなわち、需要期に押えられ気味の貸出が不需要期にずれる傾向が強まり、毎月ほぼ一貫して高水準の貸出増加が続く結果となっている。